

経理業務をデジタル化し、業務の効率と品質を向上させる ERPシステムを補完するクラウドソリューション

～マニュアル業務からの脱却、BlackLineによる経理業務改革のポイント～

ERPシステムの導入により、統合された業務データと会計データの高速度と精度向上が実現した。しかし、多くの企業では依然としてExcel等手作業に依存し、経理部門の長時間労働が続いている。さらに、持続可能な経営や人的資本の管理等の重要性が増したことにより、その役割も拡大し、従来の方法では人員や時間のリソース不足により、経理業務の効率化が急務となっている。

こうした課題に対し、BlackLineは経理業務プロセスの可視化と標準化によって、経理業務の生産性の向上だけでなく、ガバナンスの強化を実現する。BlackLineは、ERPシステムを補完するものとして欧米では多くの企業が導入している。ERPシステムがグローバルで広く浸透している中で、なぜBlackLineが必要とされるのかを解説する。

広がる経理部門の役割と経理業務の効率化の必要性

日本においては、会計ビッグバンやJ-SOX、IFRSコンバージェンス等に対応するために多くの企業がERPシステムを導入し、広く浸透してきた。ERPシステムを親会社だけでなく、グループ会社にも広く導入した企業では、グループの会計データの標準化が促進され、連結決算の早期化や連結経営情報の精度向上に一定の成果を上げることができた。

決算業務の検証過程では、会計データ以外に社内システムのデータ、Excel管理しているデータ、取引先からの各種証憑や銀行口座の残高情報等、さまざまな情報を参照し、勘定残高が正しいと判断した根拠を監査等で参照できる形で記録する必要がある。これら一連の業務処理の多くはERPシステムの外で行われる。

ERPシステムは、複数の元帳等、IFRSや日本の会計基準のコンバージェンスに対して有用な機能を有し、ルールに基づいた会計帳簿を効率的に作成する上で有用なシステムだ。しかし、決算業務のようにERPシステム外のデータを取り込んで、比較検証を行ったり、業務のログや関連文書の検証、調査結果を管理するような処理には向いていない。

また、近年の経営環境では、持続可能な経営や社会的責任の重視、人的資本の重要性の増加、財務データやビジネスインテリジェンスの活用が不可欠になっている等、経理部門の役割が従来の業務に加えて拡大している。これらの変化に対応するためには、従来の経理業務を効率化し、時間とリソースを節約するため、経理部門の変革・デジタル化を加速させることが急務となっている。

決算領域の現状

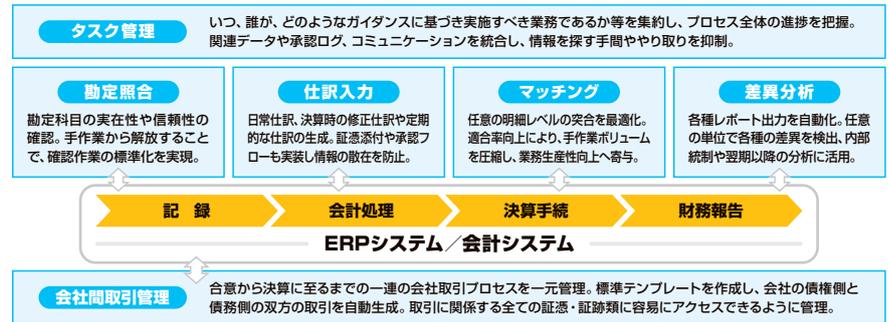
決算業務はERPシステムでは完結しない手作業やExcel、多くのオフラインコミュニケーションが残る領域



「ERPシステムを補完するBlackLine」

ERPシステムの外で手作業を中心に行われていた決算プロセスにBlackLineを活用することで、経理業務の生産性が向上し、ERPシステムの詳細なデータを活用した業績分析や提言等の事業支援活動へのシフトを促し、経営情報のデータ基盤としてのERPシステムの価値をさらに高めることができる。BlackLineがどんな機能を使い、どんな利用シーンでERPシステムでは手が届かない経理業務のデジタル化をサポートするか、その一例を紹介する。

ERPシステム／会計システムを補完する6つのBlackLineソリューション



1 タスク管理

業務を小さな作業単位に分解し、作業の順序やスケジュールを明確にし、作業のボリュームや進捗を管理する。各タスクで参照したドキュメントや関連データ、タスクの実行履歴、承認のログ、コミュニケーションの記録等、決算に関連する一連の情報を一元管理する。他の機能と同様、決算業務に限らず、通常の経理業務におけるスケジュールや関連情報の管理にも利用できる。

2 勘定照合

ERPシステムの総勘定元帳データと補助データや外部システムのデータ等をBlackLineに取り込み、残高の照合を行う。例えば、銀行の入出金明細から金融機関別預金残高を算出し、会計データ（補助科目残高）の金額と突合する。決算プロセスにおいて勘定科目の実在性や信頼性を確認する最初のステップとなる。

3 仕訳入力

BlackLineの仕訳入力は、既存のERPシステムやその他のBlackLineソリューションと連携し、仕訳の作成、検証、レビュー、転記を一元管理および自動化する。例えば、月次、四半期、年度決算で求められる各種引当金等の決算整理仕訳や残高修正の仕訳を、仕訳テンプレートを基にして、自動生成し、ERPシステムと連携させることができる。

4 マッチング

マッチングとは、明細同士を突き合わせてのチェックや確認、消込作業のプロセスのように、2種類の明細データを突合するプロセスだ。明細データの照合においては、1対1だけでなく、N対Nの照合が可能で、照合結果をもとにした自動消し込みを行う。例えば、⑤の仕訳入力と組み合わせることにより、不一致の要因である銀行手数料の仕訳の自動生成を可能にする。

5 差異分析

勘定残高の増減をリアルタイムでインポートし、自動計算してグラフや一覧で表示するレポート機能を備えている。個別設定が可能な閾値等のルールに基づいて、勘定残高の異常な増減が特定されると、差異が担当者に送信される。これにより、リスクの継続的な監視が可能になり、重要な経営管理指標の管理とレビューを効果的かつタイムリーに行い、迅速な意思決定をサポートする。

6 会社間取引管理

内部取引の関係を強め、取引の合意、承認、記帳まで一貫して行う。具体的には、標準テンプレートを作成し、会社の債権側と債務側の双方の取引を自動生成する。また、取引に関係する全ての証憑・証跡類に容易にアクセスできるように一元管理する。そして、仕訳、コメント、自動発行されたインボイスは全て関連付けられ、包括的な監査証跡と承認履歴を提供する。

「経理業務にも詳しいNTTデータ グローバルソリューションズが提供する決算業務改革ソリューション」

BlackLineの導入プロジェクトの特徴として、以下の3点が挙げられる。

- 100%SaaSのクラウドソリューションであり、短期間での導入が可能（ファーストステップは3カ月から）。
- モジュール単位の導入が可能で、最終的に目指す姿に段階的にプロジェクトを進められる。
- 導入しながら、プロセスの改善を進めることができる。

実際、ほとんどのお客様が部分的な導入からスタートし、BlackLineに対する理解や習熟度を高めながら、利用範囲（業務範囲、利用部門、導入モジュール）を広げ、BlackLineの導入メリットを早期に享受し、ステップバイステップでより大きな成果を得るという進め方をされている。

BlackLineでは、インターフェースの標準レイアウトがSAP社のERPシステムの会計伝票をベースにしている等、導入の際、同システムの会計領域に対する理解が必要だ。また、BlackLineは経理業務プロセスのデジタル化を目的としているため、経理業務に関する理解も求められる。

NTTデータ グローバルソリューションズは、SAPソリューションを中心とした日本企業のグローバル経営支援をミッションとし、ERPシステムと周辺システムを組み合わせたデジタルトランスフォーメーション（DX）推進基盤の構築に力を注いでいる。NTT DATAにおけるSAP事業の中核会社として10年以上の導入実績があり、これまで培ってきた会計、生産、ロジスティクス等のコンサルティングノウハウを駆使し、経験豊富なコンサルタントや、会計業務の専門家である公認会計士が、BlackLineプロジェクトの要件定義から導入、運用までを総合的にサポートする。

株式会社 NTTデータ グローバルソリューションズ

E-mail infoevent@nttdata-gsl.co.jp URL <https://www.nttdata-gsl.co.jp/>

【本社】 〒104-0045 東京都中央区築地5-6-4 浜離宮三井ビルディング 4F
【西日本オフィス】 〒541-0053 大阪府大阪市中央区本町2-6-8 センバセントラルビル 3F

※SAP及びその他のSAPの製品やサービスは、ドイツ及びその他の国におけるSAP SE（またはSAPの関連会社）の商標もしくは登録商標です。
※その他記載されている会社名、製品名、ロゴなどは、各社の登録商標または、商標です。
※本リーフレットに掲載されているロゴ、文章、写真その他のイラストを無断で転載、複製、再利用を禁止します。

Facebook 公開中！

「いいね」して下さい！

いいね！

<https://www.facebook.com/nttdatagsl>